# 主　論　文　要　旨　No.1

| 報告番号 | 甲　乙　第　　　　号 | 氏　名 | 加藤有佳織 |
|---|---|---|---|

主論文題名: Transpacific Fakelore of the Asiatic: Relocating Ethnicity in Nikkei Literature and Native North American Literature（アジア人北米移住のフェイクロア——日系北米文学と北米先住民文学におけるエスニシティ模倣について）

（内容の要旨）

かつてアジア人がベーリング陸橋を渡り北米大陸へ移住したというアジア人北米移住説がある。1930年代に発表され、1960年代には広く知られるようになったものの、この移住説の科学的妥当性はまだ立証されていない。しかしながら、アジア人北米移住説に基づき、日本人と北米先住民が共通の祖先を持っていると仮想する文学作品が存在しているのもまた事実である。おもに日系北米文学や北米先住民文学において見受けられるそうした作品の多くは、日本人や日系人と北米先住民との外見的類似をしばしば強調する。顔立ち、瞳や毛髪の色、肌などが「よく似通っている」と言う。祖先を共有するという想定は、日本人や日系人と先住民とのあいだの他人の空似を、何か必然的な親族の類似に変換してしまう。こうしたいわば架空の類縁関係により、それら作品はより広い歴史的・文化的文脈へ再配置される。

本博士号請求論文は、アジア人北米移住説が日系北米文学や北米先住民文学においてどのように利用され濫用されているかを観察し、これらふたつの異なるエスニックグループに架空の親類関係を見出すフェイクロアの一端を明らかにするものである。フェイクロア最初期の例として考察するのは、スコットランド人の父とチヌーク族の母を持つRanald MacDonald（1824-94年）である。彼は、1848年、「母の祖先の地」と信じた日本へ偽装漂流し、長崎奉行の監視下で約10か月間、オランダ語通訳者に英語を教えた。彼の冒険記“Japan Story of Adventure”（1923年）は、上述のフェイクロア最初期のテクストであるとともに、日本開国やオレゴン併合による合衆国=英領カナダの境界画定、大陸横断鉄道の建設といった出来事と前後し、国家横断的かつ太平洋横断的な物語の嚆矢としても重要なテクストである。マクドナルドの冒険物語は、少なからぬ作家たちの手により再生・翻案され続けている。このマクドナルドと彼の冒険をめぐる文学作品を概観するのが第1章“Literary History of Ranald MacDonald: Transpacific Relocation of the Lost Pioneer”の試みである。マクドナルドの文学史は、彼を国民的英雄として特定の国家的

物語のなかに位置付ける段階と、国家横断的人物として描く段階とに分けられる。まず Emery Eva Dye（1855-1947 年）による *McDonald of Oregon*（1906 年）に始まり三浦綾子（1922-99 年）の『海嶺』（1983 年）や吉村昭の『海の祭礼』（1989 年）は、漂流民マクドナルドを、それぞれの国民的物語のなかへと組み込んでいる。一方で、Peter Oliva（1964 年-）による *The City of Yes: A Novel*（1999 年）や Gerald Vizenor の *Hiroshima Bugi: Atomu 57*（2002 年）は、マクドナルドを国家横断的な冒険者のパイオニアとして描いている。ここで興味深いのは、それぞれに異なる作品がアジア人北米移住のフェイクロアを利用している点である。たとえば、マクドナルドをアメリカ合衆国の英雄として組み込む Dye は、まったく同時に、アジア人北米移住のフェイクロアを用いながら先住民マクドナルドをアジアと結びつけ、先住民が合衆国の領土拡張主義の重要性や、先住民の消えゆく運命を正当化する。

　マクドナルドの文学史をふまえ、第 2 章“Mixed-Blood Pioneer in Japanese Captivity: Ranald MacDonald's 'Japan Story of Adventure'”はマクドナルド自身の冒険記を再考する。それは、開拓体験記との日本捕囚体験記の混成であり、その混成テクストにおいて語り手マクドナルドは、フェイクロアを触媒としながら、自らのエスニシティを変転させている。つまり、日本人・先住民・アイヌのあいだで比較および差異化を行ないながら、ときに白人としての日本人に自らを重ね、ときに先住民とアイヌを類比させ、マクドナルドは鎖国政策下の日本を訪ねた正統なパイオニアとして自らの冒険について語るのである。

　また、もっとも最近のマクドナルドの翻案である Gerald Vizenor の *Hiroshima Bugi: Atomu 57*（2001 年）も吟味する。共時的時間・伝統と革新・系譜の混淆・多言語・複数化された歴史を体現する混血インディアンのキャラクターの伝統（Brown; 巽）と、フェイクロアによるエスニシティの再配置が起こる作品である。マクドナルドの冒険記が松尾芭蕉の『奥の細道』（1689 年)や Lafcadio Hearn(1850-1904 年)の *Glimpses of Unfamiliar Japan*（1894 年）と混合された本作は、先住民の起源を混血化し、さらに移民として再解釈してみせる。

　第 3 章から第 5 章は、日系北米文学におけるフェイクロアの利用を、より広い歴史的・文化的文脈において考察する。日本人と先住民の仮想された類縁関係は、第二次世界大戦後には犠牲者としての協働をもたらす。太平洋戦争時

# 主　論　文　要　旨



のアメリカおよびカナダにおける日系人強制収容は、19 世紀をとおして行なわれた先住民の強制移住に連なる問題とみなされ、戦後の補償運動のなかで日系人と先住民との共闘可能性が意識されるようになった。たとえば日系カナダ人作家 Joy Kogawa（1935 年-）は、その戦略的連帯を「日系人が原住インディアンと自己を同一化するというものすごく大きな課題」と表現する。犠牲者同士の連帯はたしかに、政治社会活動のなかできわめて有効な戦略であった。こうした政治的な有効性を認めたうえで、日系人が先住民に犠牲者として同一化することの歴史的文化的意義もまた検討されなければならない。なぜならば、日系移民はたしかに「先住民のような犠牲者」としての自画像が描き出す一方で、収容体験以前には先住民との差異化を図っていたこともまた歴史的事実であり、強制収容体験のみに注目し、それを日系移民史の提喩のように取り扱ってしまうのはあまりに健忘症的であるからだ。

第 3 章“Cultural History of Barbed-wire Fence”は、日系移民をより広い北米の歴史に再定位するための背景として、有刺鉄線の文化史を提示する。その歴史を紐解くならば、有刺鉄線のフェンスは、西部開拓と戦時強制収容が隣接するインターフェイスとして機能することが明らかになる。強制収容政策における西部開拓物語の翻案を端的に表すのが有刺鉄線のフェンスなのである。戦時情報局による強制収容のプロパガンダがその好例となる。日系収容者たちは、開拓者でもあったのである。強制収容政策における西部開拓のイメージ借用は、強制収容という日系移民に対する制度化された人種差別を美化する一方で、収容者たちにとっても必要な物語の枠組みでもあった。

第 4 章“Pioneer Narrative of an Internee Girl: Cynthia Kadohata's *Weedflower*”と第 5 章“Internment Narrative of a Pioneer Girl: Hiromi Goto's *The Kappa Child*”は補償運動以後の強制収容体験記—Cynthia Kadoata（1965 年-）の *Weedflower*（2006 年）と Hiromi Goto (1966 年)の *The Kappa Child*（2001 年）を考察するともに、開拓物語と強制収容体験記を重ね合わせることによって、犠牲者として表象されてきた日系移民を開拓民として、より広い移住の歴史に再定位する。前者においては、強制収容を美化した開拓の神話のなかで、灌漑農業に従事する収容者はむしろ無名の歩兵としての開拓民となる。後者は、19 世紀開拓物語に明らかに言及しつつ、強制収容を読み込む可能性もほのめかす。日系移民は先住民の土地を奪い彼らの現在進行形の問題に加担するものとしてのみ開拓民になることを描く。

*Keio University*

# Thesis Abstract

No. 1/2

| Registration Number: | □ "KOU" □ "OTSU" No. *Office use only | Name: | Yukari Kato |
|---|---|---|---|

Title of Thesis:
Transpacific Fakelore of the Asiatic: Relocating Ethnicity in Nikkei Literature and Native North American Literature / アジア人北米移住のフェイクロア――日系北米文学と北米先住民文学におけるエスニシティ模倣について

Summary of Thesis:

Fakelore of the Asiatic is the subject of this dissertation. It refers to a literary appropriation of a popular theory of migration from Asia via the Beringia Land Bridge to Americas. The theory is now scientifically dubious and morally inappropriate; however, it is also true that there have been some literary works which appropriate the Asiatic migration theory. They conjure up a shared ancestry and transform the chance resemblance between Nikkei and Native Americans into the tangible similitude of natural kinship. The fabricated kinship provides writers, especially Nikkei and Native North American writers, with a narrative motive which relocates Nikkei and Native North American into broader history of immigration across the Pacific. Based on the recent reconsideration of ethnicity in terms of multinational and multicultural interaction, this thesis describes a mechanism of Nikkei and Native North American literary self-portrayal by way of the Asiatic fake kinship.

Part 1 concerns a Scottish-Chinook explorer Ranald MacDonald (1824-94) and his narrative as the earliest manifestation of fakelore of the Asiatic in the late nineteenth century. Part 2 examines novels by Cynthia Kadohata (1956-) and Hiromi Goto (1966-) as the postwar Nikkei revisions of the fakelore.

Part 1 provides a literary history of Ranald MacDonald. Having stemmed from the multinational context of the U.S., British Canada, Chinook, Ainu, and Japan, MacDonald and his narrative has undergone a transition from the nationalization phase in which such writers as Eva Emery Dye (1855-1947), Miura Ayako (1922-99), and Yoshimura Akira (1927-2006) situate MacDonald in their national narratives, to the internationalization phase in which writers like Peter Oliva (1964-) and Gerald Vizenor (1934-) recast MacDonald into the transpacific cultural interactions. In each phase, fakelore of the Asiatic works as the pivotal shaft around which various writers convert MacDonald

into their own narrative.

Within this literary background, Chapter 1 explores how MacDonald's narrative builds its literary mobility upon fakelore of the Asiatic. The repeated editing made the final text of "Japan Story of Adventures" into a combination of pioneer narrative and captivity narrative. In this blended narrative, MacDonald's self-portrait changes through triangle comparison and contrast between Native North Americans, Ainu people, and Japanese.

The next chapter analyzes Vizenor's *Hiroshima Bugi: Atomu 57* (2002) as the postindian faking of the Asiatic fakelore. The novel partly recovers the Ainu presence, which has been long lost in the series of adaptations, in the form of the protagonist's lost mother. *Hiroshima Bugi* blurs MacDonald's self-distinction from the Native North American and the Ainu and recasts MacDonald's narrative into an origin myth of immigrant.

Part 2 introduces a cultural history of barbed-wire fence as an interface between pioneer narrative and internment narrative, as a backdrop to reconsider Nikkei use of the Asiatic fakelore within longer history of immigration and settlement. Nikkei cases are often predicated upon an analogy between Native North American removal throughout nineteenth and twentieth centuries and Nikkei internment during the Pacific war and imply the Asiatic victimhood. A cultural history of barbed-wire fence shows that the Nikkei self-portrait as victim is rather single-sided.

From this context, Chapters 3 and 4 read pairwise Kadohata's *Weedflower* (2006) and Goto's *The Kappa Child* (2001) as mixed narratives of pioneering and internment which complicate the Nikkei self-portrayal compared with Native American victimhood. Relocating itself from the limited history of Nikkei internment, the pair explores another way to represent Nikkei in relation to Native North American. *Weedflower*, an internment narrative lined with pioneer narrative, reconstructs a life in Poston Relocation Center built on Colorado River Indian Tribes Reservation. The novel represents Nikkei internees as part pioneers and part victims. Likewise, *The Kappa Child*, a pioneer narrative of the postwar Issei haunted by internment narrative, adapts *Little House on the Prairie* (1935) by Laura Ingalls Wilder (1867-1957) and offers a shifting portrait of post-WWII Nikkei pioneer wannabe.